

きいてくらっしやい

昔話

長岡民話の会会報
第2号
平成17年4月発行

新メンバーの紹介：

笠井さん、五井さんに続き田村紀夫さんが入会されました。1月22日の「きいてくらっしやい昔話」の会で五井さん、田村さんお二人にも語っていただきました。

また、長岡市中央公民館主催の「あったてんがの かたりべ教室」の受講生数名の方が入会される予定です。

例会予定：

水曜日例会… 4月6日、5月11日、6月8日 (PM18:30~20:30)

土曜日例会… 4月30日、5月28日、6月25日 (PM13:30~15:30)

出前予定：

☆ 4月2日(土)健康食クラブ(長岡市老連)の総会

☆ 4月23日(土)越路町老人会

— 昨年大好評につき今年も出演の依頼が来ました！ —

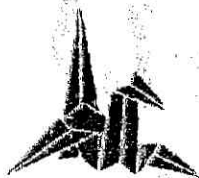
活動報告：

その1・長岡市中央公民館から「あったてんがの かたりべ教室」の講師依頼があり、2月16日・23日(水)に青柳さん、高野さん、堀井さん、安部さん、今井(淳)さん、大貫さん、番場さんが講師を務めてくださり「長岡民話の会」の実力を大いに発揮していただきました。

その2・大島小学校2年生の授業の中で語りをやってきました。(高橋先生、高野さん、岡崎さんが出演)生徒さん達から可愛らしい感想文をいただきました。



中央公民館「あったてんがの かたりべ教室」講座風景



昔話の森 (二)

高橋 実



二、小国の民話学校

私が再び昔話に向き合うようになったのは、それから三十年後の、昭和六十一年からである。その三年前、小国に、東京の芸術家達がやってきて、小国芸術村運動が起こっていた。小国芸術村運動の発端は、水上勉の「越前紙漉き唄」が上演することになって、関係者が古いやり方で和紙を漉いている小国町に見学に来たことが発端である。小国町内の西側山系の麓にある山野田地区は、古くから紙漉きの村だった。そこに、過疎地で空家になった家が目立っていたので、東京の芸術たちが、芸術創造の場として、セカンドハウスにしたいと申し出て来たことからであった。その中に、切絵作家で舞台芸術家の西山三郎氏、放送作家の若林一郎氏がいた。

この人たちは、日本民話の会の人達とも交流があって、小国町で日本民話の会主催の民話学校を開きたいと申し出があったのである。地元では、昔話に関係していた、昭和六十一年四月、民話の会の実行委員七人が小国にやってきて、地元からは、役場の久保重嗣さん、私・永見恒太・山崎正治さんが呼ばれて話し合いがもたれた。西山さん・若林さんも実行委員として、出てきた。童話作家の松谷みよこさんもやってきた。その席で山崎正治さんが私の三十年前のガリ版刷り「小国の昔話」を持ってきて、みんなの前で披露したのである。昭和六十一年七月小国に民話の会人達が百人で小国にやって来た。夜は中学校の空いている寄宿舎に泊まって二泊三日の日程で行われた。水沢謙一さんも参加した。水沢謙一さんは、小国で集めた昔話を長谷川孝前助役が教育委員会勤務の頃に原稿のまま、預けたと話された。しかし、その原稿には、誰の、どんな話が収められていたのだろうか。そんな事は、長谷川さんは、記憶がないという。今から考えると惜しいことだという気がする。

会の最終日には、参加者が集落の中に入って、直接話者を捜したいというのである。その前に、少しでも昔話を知っている人のリストをつくりたいと思って、集落を回って見た。しかし、三十年間で集落内の様子は、大きく変わっていた。いろいろな伝をたどって電話してみても、昔話を語ってみようという人は見つからなかった。集落の老人会長に頼んでも、なかなかうまく行かなかった。この時やってきた民話の会のメンバーには、渋谷勲さん、会長の吉沢和夫さん、水谷省三さん、米谷陽一さん、樋口淳さんといった人たちがいた。猿ヶ京ホテルの持谷靖子さんもいた。この会の参加した若い女性から民話は、絵本で読むものだと思っていたら、田舎のおばあさんの口から昔話が出てきたのに驚いたという感想を述べる人も居た。また都会と違って夜になると、街灯もなく、真の闇夜で、真っ暗な夜というものをはじめて経験したという感想を述べる人もいた。昭和六十二年五月に小国芸術村では「小国芸術村フェスティバル」を催した。このイベントの中で、芸術村友の会では、山野田の若林一郎購入の館を会場に「小国のとんとむかし」を主催した。この会で永見恒太さん、山崎正治さん、粕川クラさん、中村クニさんが話者として出演した。

こうして昔話は、炉辺で語る昔話から舞台上で語る昔話へと形を変えて語り継がれることになった。日本民話の会発行の雑誌「民話の手帖」で昭和六十二年夏号では、「越後小国の昔話」特集が組まれた。ここには、三十年前の私の編集した「小国の昔話」二十八話がそっくり収載され、更に、ノートに残っていた残りの部分二十話も加えて合計四十八話が収載された。この編集は、若林一郎氏の編集になっていた。方言などには、脚注も付けられた。

この昔話を讀んだ西山三郎さんが、「笠地藏」はよく知られてた話だが、ここでは、笠ではなくて、縮の切れを地藏さんにかぶせる話に変わっているという感想を漏らされた。昔話が地元の産物に置き換えられている。この雑誌には、小国の人たちが出て、昔話の思い出を語る「民話とむらおこし」の座談会も載せられた。この座談会の中で、昔話は、筋は忘れても、部分部分の言葉は、大きくなっても忘れないという話を片桐三郎さんがした。松田薫さんが、ご主人とお寺付近を車で走行中に人魂とも思われるものにあつた話など印象に残っている。

こうして、三十年ぶりに私は、昔話に戻ってきた。昔話があまりに身近すぎてその価値に気づけなかったのに、都会の人がその素晴らしさを教えてくれたのである。私は、改めてこの昔話の世界の中に踏み込んでゆくのである。日本民話の会のおかげで昔話の話者で小国町苔野島に住む粕川クラさん（明治三十五年生まれ）を知ることが出来た。またクラさんの近所の粕川悦さんも昔話の話者である。クラさんの話の「鬼の笑い」は、今でも。私の語りのオハコになっている。話好きのおじいさんが、一度も笑ったことがない鬼に「来年の話」をすることで笑わせ、極楽に行くことが出来た話である。



…お知らせ…

高橋実文学展が下記の日程で開催されます。皆さま是非ご来場ください。開催初日には詩人・八木忠栄さんの講演「新潟県の風土と文学」もあります。

記

- ・日 時：平成17年4月23日（土）～26日（火）
- ・時 間：am9:00～pm5:00（最終日はpm3:00まで）
なお25日は休館日になっています。
- ・場 所：長岡市中央図書館
美術センター及び第1講義室・講堂
- ・入場無料

詳細につきましては高橋実文学展 実行委員会にお問い合わせください。

TEL (0258) 34-7584

ちよっといっぷく



「第1回 きいてくらっしやい昔話」を終えて

地震でのびのびになっていた発表会を場所を変え、1月22日に開催しました。内輪だけの会でしたが大いに盛り上がりました。出演者を代表して五井さん、渋谷さんからご感想をいただきました。



民話の会に参加して 青柳 保子

この2年足らずの間に私はこっそりとおばあちゃまになっています。お婆ちゃま、波立っている女、目尻が・・・失礼しちゃう。そうではなくて、おばあちゃまの役割に心を波立たせ、夢と希望を湧きあがらせています。その夢の一つが、孫チンに昔話を聞かせよう、という計画です。

お婆ちゃまがまだ若いママだった頃、子供達と絵本を囲んで過ごした楽しい夜の思い出、幸せだったなあ。子供達にもホントにいい思い出のようです。そして子供に読んでやりながら、私も幼い日に母からくり返し絵本を読んでもらった記憶を懐かしんだのでした。昔話はその幸せの延長線上にあります。

さて近頃、音読や暗証が脳の様々な働きを高める効果があるといわれています。「昔語り」はきっと頭の回転のいい語りジサ、バサを育成してくれるはず。そんなこともちよっと期待して皆さんに付いていこうと思っています。よろしく



「いいかったてー」 五井 俊

以前から、昔話也民話には興味があり、雑誌などの各地の民話は好んで読み、何かゆったりとした気分を味わっているが、去る1月22日の発表会では、皆さんの何とも云えない味のある語り口には感激しました。

例会は忘れずに？出席し積極的に楽しんでいきたい、そして一日も早く語れるよう努力します。本当にいいかったてー。



渋谷 節子

民話の会はいろりをかこんだようなあたたかい会ですね。今の時代やテレビから話を聞くため、人と人との触れ合いが失われている事も多いと思います。幼い子どもや小中学生には1対1の「話しかけ」や「語り」がとても大切な事ではないでしょうか。発表会は仲間だけで行いましたが、ほどよい緊張の中で一つ一つがすばらしく楽しく幸福なひとときでした。

編集後記

会報の発行を心待ちにしていた会員の皆さま、大変長らくお待たせいたしました。「1月は行く、2月は逃げる、3月は去る」といいますが、月日の経つのは早いもので気がつけば、もう3月も去っていく…。ああ、すみません。原稿を早々と送って下さった皆様ありがとうございました。どうぞ忙しい日々の生活の息抜きにお読みください。これからもよろしくお願ひします。

BY CHIHIRO